

Title	活動報告
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2008
Jtitle	Newsletter Vol.5, (2008. 10) ,p.6- 7
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000005-0006

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

活動報告

開催日	研究・運営プログラム名	会議等の名称
7月3日	哲学・文化人類学班	習俗としての呪術の再活性化とアフリカの現代化「習俗論から〈呪術〉を再考する」
7月4日	論理・情報班	日仏共同哲学研究会 「現象学と言語哲学におけるオントロジー」
7月5日	論理・情報班	日仏共同哲学研究会 「現象学と言語哲学におけるオントロジー」
7月5日	脳と進化班	第24回脳の講習会「脳の進化」
7月8日	発達と遺伝班	進化と人間
7月10日	全体	第31回日本神経科学大会 (Neuroscience 2008) 特別講演
7月11日	全体	第31回日本神経科学大会 (Neuroscience 2008) シンポジウム「Neuroscience of self-awareness」
7月12日	全体	慶應義塾創立150年記念ニューロサイエンスシンポジウム「From molecule to cognition」
7月13日	全体	第13回認知神経科学学会学術集会
7月23日	脳と進化班	バーチャルマイクロスコプを用いた画像解析講習会
8月3日	哲学・文化人類学班	文化とこころ：精神医学・人類学・歴史学の対話
8月7日	論理・情報班	プラトン「敬虔」論セミナー
9月8日	言語と認知班	Patterns in Language and Thought
9月15日	言語と認知班	英語教育の新時代 — 「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」を超えて

第13回認知神経科学学会学術集会

特別講演 Neural networks and cognition: an evolutionary perspective

シンポジウム 比較解剖学は認知神経科学にどのように貢献するか (7月13日開催)

去る7月13日、第13回認知神経科学学会学術集会（於：東京大学武田ホール）にて行われた、人文GCOEの招聘による Michel A. Hofman 氏（オランダ神経科学研究所）の特別講演 “Neural networks and cognition: an evolutionary perspective” と、脳と進化班の企画によるシンポジウム “比較解剖学は認知神経科学にどのように貢献するか” について報告する。Hofman 氏は、大脳皮質の配線様式がもたらす情報処理の利点と限界について講演された。大脳皮質には6層の“高さ制限”があるため、領野間連絡は水平方向に限られる。層内の水平軸索のみによる非効率伝達を避ける上で、皮質の皺は、領野間距離を縮め、類似モジュール間の伝達効率化をもたらすデザインといえる。また、高次認知の基盤となる長距離領野間の連絡は白質・灰白質を経由するが、機能向上のためのモジュール増加が、経由地である白質/灰白質の体積を“べき乗”で増加させるというジレンマを引き起こすため、モジュール数と脳容量に限界があること示された。続くシンポジウム（オーガナイザー 渡辺茂）

では、伊澤栄一（人文GCOE）、山本直之（名古屋大）、池田譲（琉球大）らが、カラス、魚、イカの脳構造と社会認知について話題提供した。伊澤は、脳と進化班の一環であるカラス研究の成果として、脳の比較計測による連合領域の顕著な発達と、野外施設で見出した群れ構造の複雑さについて講演した。山本氏は、魚類の性転換行動や観察学習という社会行動を冒頭で紹介し、真骨魚類の終脳には、匂いだけでなく視覚や側線感覚などの感覚情報が終末しているデータを示され、魚類終脳における認知機能解析の必要性を述べられた。池田氏は、脊椎動物とは全く違うデザインを持つ頭足類イカの脳の構造を紹介され、鏡映像課題でみられた社会行動と群れ状態における個体間相互作用のデータを示され、イカにおける社会行動と脳発達の関係について述べられた。シンポジウムは、期せずして非哺乳類における社会行動と脳という話題でリンクし、活発な会場からの質問はもちろん、演者間においても人文GCOEを核とした研究交流の可能性を探るよい機会となった。（伊澤栄一）

シリーズ「教育の進化的基盤を探る」

教育を進化の視点から考える？ いくら「進化なんちゃら学」がはやっているからって、「教育」はもう確実に歴史的、文化的な人間的産物なんで、いくらなんでも進化とは無関係でしょ…といろんな人に言われました（ここで紹介する講演者のうち二人も、何を隠そう初めはそうだった）。確かにカントは「人間は教育しなければならない唯一の被造物」という有名なことばを残しています。しかしこれはとりもなおさず、人間が動物の中でも特に「教育」行動を必要とする種として進化したことを意味するではないですか。その目で見ると進化の過程での「教育」の前駆行動として、いろんな動物たちが「教育もどき」のことをしている。それどころか2006年以降ミーアキャット、アリ、ヤブチメドリに、それぞれ教育（積極的教示行動）が見つかったという、歴史的発見が相次ぎました。さらに面白いのは進化の隣人チンパンジーに「教える」能力がないということ。それに対し人間は教えたくて仕方がない動物と言えるでしょう。きっとここに教育学の究極の問い「教育とは何なのか」の答えが潜んでいるに違いありません。

ということで、次のような錚々たる方々に、教育学設置の「教育学概論」の中で、おそろおそろ話題提供をお願いしたところ、これも驚いたことに、このお忙しい皆さんがみな快く引き受けてくださいました。お名前とテーマは以下の通りです。

- 4月 岡ノ谷一夫（理化学研究所）「鳥の歌から言語と教育の起源を考える」
- 5月 友永雅己（京都大学霊長類研究所）「チンパンジーに“教育”はあるのか」
- 6月 平石界（京都大学こころの未来研究センター）「内的環境への適応と教育」
- 7月 佐倉統（東京大学情報学環）「進化と人間」

「教育」という現代社会の大きな関心事を、きちんと科学的にとらえ直す枠組み作りに、「進化」という視点はやはり重要な役割を演じてくれることを確信させてくれる講演会でした。（安藤寿康）

意味論研究会 (6月27日開催)

On June 27th, the 8th meeting this year of the Semantics Research Group was held at the Mita Campus of Keio University. We were fortunate to have presentations from two very gifted speakers, Kimiko Nakanishi, an assistant professor at the University of Calgary, and Masahiko Aihara, a Ph.D. student working on his dissertation at the University of Connecticut at Storrs. The talks were well attended, with participants coming from as far away as Nagoya, Hirosaki and even Boston, and the discussion was both lively and instructive.

Professor Nakanishi gave an insightful presentation on the Japanese particle *mo*. As she showed in her talk, this particle gives rise to what is called a “scalar” interpretation. In a positive sentence like 五人も来た, the occurrence of *mo* implies that on a “scale” that arranges numbers of people who came, say from one on up to some larger number, 5 counts as a large number. In a negative sentence like 五人も来なかった, this same property of *mo* was argued to give rise to an ambiguity. Under one reading, 5 is implied to be a large number of people to have not come. On the other reading, 5 is implied to be a small number of people to have come. This difference was shown to be best derived as a difference in scope. The analysis was then extended to account both for the obligatory “small” reading found in パンを一枚も食べなかった when *iti-mai* is unaccented, and also for an ambiguity parallel to that observed above when *iti* contains a fall accent. This work was significant in bridging the semantics of scalarity

with the semantics of focus and accent.

Mr. Aihara gave an enlightening presentation on the analysis of superlatives. In English, a sentence like “John climbed the highest mountain” is ambiguous. It can have an absolute reading, according to which there is one highest mountain in the world (Mount Everest), and John climbed it. It also has a comparative reading, which allows John to have climbed a shorter mountain than Mount Everest as long as the mountain he climbed was higher than the mountains that other relevant people in the discourse climbed. This ambiguity in English has given rise to two separate analyses: one that appeals to syntactic movement of a superlative morpheme (e.g. *-est* in English) coupled with abstraction over degrees in the semantics, and one that simply manipulates the value of a context variable. Mr. Aihara teased those two analyses apart by investigating how their separate predictions fared with Japanese. As he observed, the Japanese counterpart of the English sentence given above, i.e. ジョンがいちばん高い山に登った, does not give rise to the same ambiguity. It only has the absolute reading. This observation was used to argue in favor of the former analysis and against the latter. Mr. Aihara’s work highlights the growing significance of cross-linguistic studies for determining the universal mechanisms used to interpret natural language.

(Christopher Tancredi)

プラトン「敬虔」論セミナー (8月7日開催)

論理と感性の間には「信じる」という問題がある。神、あるいは人間を越えた存在を認めることは、単なる理性的な判断ではないが、直感による把握でもない。「信仰」はキリスト教哲学の主題となるが、古代ギリシアでも「敬虔」は「知恵・正義・節制・勇気」と並ぶ主要徳目であった。プラトンは初期『エウテブロン』でその概念を吟味するが、主著『国家』以降では「敬虔」を「正義」の一種として扱い、独立の役割を認めていないように見える。

裁判で争われたソクラテスの「敬神」について、マーク・マクフェラン教授(カナダ、サイモン・フレーザー大学)は、これまで『ソクラテスの宗教』(法政大学出版局)を中心に、精力的に研究されてきた。今回はソウルでの世界哲学会大会参加に合わせて、慶應で関連する主題をお話いただいた。

プラトン『テアイテトス』では「脱線部」と呼ばれる議論で、哲学者は人間にできる限り正しく敬虔になり、「神に似る」という理念が語られる。プラトンはここで「敬虔」に新たな意味を込め、独立の道徳理念と

して復活させたのか。マクフェラン教授はこの問いを多角的に分析し、結論として「敬虔」が特別な扱いを受けている訳ではないことを示唆する。セミナーではこの議論が、プラトンがプロクダスの相対主義に対抗して絶対的な知識論を確立する、重要な文脈に置かれていることを確認した。

教授はこれまでの研究で、ソクラテスの敬神が彼の論理的な「哲学」営為の基盤にあることを説得的に論じている。理性的な議論と宗教的な信念とは相反するものではなく、ギリシア哲学において一体のものであった。マクフェラン教授のセミナーは、若い参加者たちとの活発な議論をつうじて、論理と感性という問題系により広い視野を与えてくれた。(納富信留)



New Directions in Cultural Psychiatry 文化とこころ：精神医学・人類学・歴史学の対話 (8月3日開催)

90年代以降の精神医学のグローバリゼーションを背景に、「文化とこころ」の問題領域が改めて注目を集めている。うつ病等の薬物治療が世界的規模で展開される一方で、臨床のあり方や患者の経験には地域差がみられるなど、生物学—文化相互作用に関する問題はますます複雑さを増している。このような問題意識から、哲学・文化人類学班の文化人類学グループでは、マッギル大学・多文化間精神医学部門の所長で、Transcultural Psychiatryの編集主幹であるL. J. Kirmayer教授(社会学研究科特別招聘教授)を迎え、8月3日三田キャンパスにおいて「New Directions in Cultural Psychiatry 文化とこころ：精神医学・人類学・歴史学の対話」と題した国際シンポジウムを行った。カーマイヤー教授にはSociosomatic Theory: Toward a Typology of Looping Effectsに関する講演で文化精神医学最新の知見をご紹介いただき、九州大学精神科教授・神庭重信先生には現代日本のうつ病について、慶大クリニカルリサーチセンター・佐藤裕

史先生にはプラセボ効果における主観性・客観性の問題、慶大精神科・栗原稔之先生には東京とパリの統合失調症の文化差、またYale大学人類学部のEllen Rubinstein氏には北米精神科実践に関する医療人類学的研究について講演いただいた。慶大経済学部・鈴木晃仁先生と、文学部宮坂敬造先生から全体総括のコメントがあった。社会科学、精神医学領域における著名な学者が数多く参加し(参加者数は70名)、最後まで活発な議論が続く、大変盛況な会となった。また海外からの研究者の参加も多く、日本の精神医学の状況と医療の人類学的研究に対する関心の高まりを感じさせた。(北中淳子)

